

31. 不登校・ひきこもりの子どもと知的障がい児の交流活動

グループ名：ジャムの会

代表者：足立鈴子

①活動の目的

不登校・ひきこもりの子どもと知的障がい児が、絵画やパン作りなどのともに行える活動を通じて交流すること。エネルギーや意欲には乏しいが知的な理解力は十分ある不登校・引きこもりの子どもたちと、知的な理解力に難はあるがエネルギーと意欲にあふれた知的障がい児の両者は、親しさを育める少人数のグループで時間をかけて交流すれば、長所と短所に相補性があるので、どちらの成長にもつながるのではと考えた。

②活動概要

A：不登校・ひきこもりの子どもが知的障がい児の放課後デイを訪問（平成26年11月）



B：知的障がい児が不登校・ひきこもりの子ども・若者の居場所を訪問し、臨床美術活動を行う(平成26年12月、1月)



りんごを素材に作品を作りました



作品を手に記念撮影

C: 不登校・ひきこもりの子ども・若者の居場所でアート活動を定着させる（平成 27 年 6、7 月）



D: 不登校・ひきこもりの子ども・若者の居場所でのアート活動に年少健常児が参加（平成 27 年 8 月）



針金を素材に作品作り - 子供もお父さんと参加

< 結果 >

1. 交流活動自体の難しさ

普段、不登校・ひきこもりの子ども・若者と知的障がい児は同じ「場」に所属していない。この異なる「場」に属する 2 グループを交流させることは、事前に考えていたよりもずっと難しいことだった。障がい児の放課後デイに若者を連れて行くには、ある程度元気が出てきていて障がい児に働きかけることができる若者である必要があったが、元気が出てくると復学や就労活動に本人たちの意識は向かうので、継続的に連れて行くことが難しかった。一方障がい児を不登校・ひきこもりの子ども・若者の居場所に連れてくることも難しかった。障がい児の放課後デイの時間の関係上、もともと長期休暇中の数日に限定して交

流活動を設定していたが、予定していた児童が転校するという予測できない事態が起きたり、また別の来所予定だった児童も、体調不良や家の都合などで3度当日キャンセルがあった。環境の変化への対応を苦手とする知的障がい児にとって、場所の移動はこちらの予想以上に本人の心身に負担だったのかもしれない。交流活動がなかなか進まないため、平成27年8月には、小1の健常児を招いて不登校・ひきこもりの子ども・若者との交流活動を行った。また活動内容に関しても、絵画・アート系活動は両グループともに楽しめ、共有できる活動であることがわかったが、当初予定していたパン作りは、工程が複雑で待ち時間を随所を含むため障がい児には難しすぎるだろうということが、実際に交流活動を行ってみてわかった。(そのため平成27年3~4月に予定していたパン作りは中止し、アート活動での交流を継続した。)

2. 不登校・ひきこもりの子ども・若者と障がい児・年少健常児の相補性

障がい児・年少健常児(以降「後者」と記述)は「はじめの一步」に、不登校・ひきこもりの子ども・若者(以降「前者」と記述)は地道な持続、継続する力に強みがあることがわかった。前者は活力に乏しく、動き始めるのに時間がかかるが、後者はすぐに取り組み始めるので、前者を勢いづけていたように思われる。また後者は途中で活動に飽きている様子も見られていたが、前者が静かに根気よく作品を作っていたのに影響を受けてか、立ち歩いたりすることもなくその場で静かに活動に取り組み続けることが出来た。前者は自分から他者に働きかける力が弱い、後者が(もちろんその子の性質にもよるが)無邪気に言葉を発したり動いたりするので、前者がそれに反応して後者に笑いかけたり物を渡したりすることもあった。会話のようなはっきりとした「交流」は時々見られただけだが、上記のように良い影響をお互いに与え合っていたように思われた。

3. 継続したアート活動に参加することの効果

活動の前半(H26年度)は、臨床美術の講師を京都市内から不登校・ひきこもりの居場所に招いて交流活動を行っていた。この時は交流活動時のみ講師に来てもらっていたため、居場所の子ども・若者たちもその都度まず講師に慣れる必要があり、交流以前にその場に何となく緊張感のようなものがあった。それでH27年度は、近隣の舞鶴市から月2回、交流活動以外の時にも継続的にアート活動の講師に来所してもらい、居場所の子ども・若者たちが講師に慣れて場の雰囲気が整ったうえで、外部から子どもに来てもらうことにした。ゆったりとした雰囲気の中で、のんびりと一人ひとりが自分の制作活動をしつつ、お互いに影響し合っていたように感じられた。アート活動は交流活動以後も10月いっぱいまで継続したが、もともと自己表現の苦手な不登校・ひきこもりの子ども・若者たちが、苦手なお喋りをせず黙々と作業して自分を表現し、メンバー同士お互いに良さを認め合うこともできるという点で、彼らの心を解放する効果的な手段となっている。

③決算報告書

収入	大同生命厚生事業団助成金	90,000
支出	臨床美術講師料（材料費、交通費含む） 10,000 円×2 回分	20,000
	チラシ作製費 A4 カラーコピー30 円×100 枚	3,000
	臨床美術作品用額縁 108 円×12 個	1,296
	アート教室講師料 5,000 円×11 回分	55,000
	アート材料費（絵具、水彩セット、画用紙、マジック、 鉛筆、シールなど）	11,397
	合 計	90,693